

予想を上回る豪雨が襲った。

近年、毎年の如く激甚化している自然災害。昨年も「九州北部豪雨」が発生し、私たちが暮らす筑豊地区の添田町で、大きな恐怖と被害をもたらしました。「もしも」の時に、自分や大切な人を守るためには、どうしたらいいのか？ 昨年の豪雨により添田町で発生した土砂災害の現場で指揮を執った田川地区消防署本署中隊の立花慶朗中隊長にお話しを伺いました。

突然の豪雨が町を襲う 想定を超える雨量と恐怖

昨年、7月8日から11日かけて予想を上回る豪雨が九州北部を襲いました。添田町では、9日の夜にかけて降雨と小康状態を繰り返す状態が続きましたが、10日の2時頃から非常に激しい雨が降り出します。添田観測所では4時からの1時間雨量37.5mmを観測。英彦山では、10日の10時に24時間降水量の日最大値は観測史上最も多い423mmを記録しました。この時、町は気象庁などから発表される気象情報を基に町内全域に警戒レベル4「避難指示」を発令します。さらに降りやまない雨に7時20分、大雨特別警報が発表されたことから警戒

昨年発生した添田町庄での土砂災害では本署中隊長として、令和3年添田町落合地区の土砂災害では消防隊長として現場活動の指揮を担当。平成21年の弁城地区の土砂災害時は警防課指令室（現指令課）での任務を遂行。

田川地区消防署 本署中隊 中隊長
立花 慶朗 氏

レベル5「緊急安全確保」を発令。添田町内にある9箇所の避難所に最大121人が避難しました。この豪雨で土砂崩れによる孤立集落の発生や、尊い命が失われるなど、想定を絶する恐怖を味わいました。



1 長さ20m以上の木が倒れて道路をふさいだ、国道500号の中河原町バス停付近で発生した土砂災害。
2 罹災建物の裏にある小さな川に土砂が流れ込み、その土砂がさらに広範囲で流れ込み本流の彦山川にも流入。
3 日田彦山線の線路土手が全て流され、宙に浮いた線路。



↑JR日田彦山線・彦山駅付近の川が九州北部豪雨で氾濫。

「災害時は焦って当然」 事前を知ることの大切さ

災害時は必ずパニック状態になり、どうすればいいのかわからなくなります。このような状態になるのは当たり前。災害時では、小さな行動が生死を分けます。慌てず、スムーズに行動できるようにするために、日頃の「備え」が必要だと考えています。備蓄を準備することだけが「備え」ではなく、救助活動を依頼する時に

特集 命を守るために

必要な住居の位置、近所の目印の確認や災害時、家の中の避難場所を決めることなども「備え」の一つ。命に代えられるものはありません。自分や大切な人の命を守るため、事前に最悪の場合を想定し「備え、考えること」が重要です。

↑国道500号の鍛冶屋町バス停付近で発生した土砂災害が道を寸断



↑豪雨で流された桜橋付近の護岸。国土交通省による懸命な復旧作業で仮復旧工事は、わずか7日間で終了。

防災から地域活性化へ 広げ高める防災意識

災害時、情報の伝達と共有はとても重要になってきます。高齢者や病気のかたなど、すぐに避難できない人もいます。事前に避難経路や連絡網の確認、地域コミュニティの構築、行政、公的機関との情報交換を行うことで助かる可能性が高まります。

「共助を高める」地域コミュニティの活性化になると、私は考

えています。いざという時は、人とのつながりがみなさんを災害から守ります。災害が多発している今、地域とのつながり「共助」を考え、一人ひとりが防災意識を持つことで「自助」を高めることが重要になってきます。みなさんが防災力を身につけることで、我々もいろんな場面でスムーズに救助活動が行うことができます。

我々とみなさんは、いつくるかわからない自然災害から命を守るためにともに助け合いながら立ち向かわないといけないのです。

過去の悲劇と教訓を忘れぬように

7月24日は「福智町 防災の日」

平成21年7月中国・九州北部豪雨により本町に大きな被害をもたらした災害の体験と教訓を永久に忘れることのないよう町民一人ひとりが様々な災害についての防災意識を高めるとともに、町は町民との協働により災害に対する備えを十分に強化し、安全で安心なまちづくりを推進するために7月24日を「福智町 防災の日」と決めました。我々はこの条例に基づき身辺及び地域の安全確認や防災知識の習得に努めて地域防災力を高め、一人ひとりが危機感をもって防災に取り組むことが重要です。

→「防災の日」を定めた石碑

